

## 原則の分析論

高級認識能力である、悟性（概念）・判断力（判断）・理性（推論）は、悟性一般という広範な名称のもとに包括される。

\* **判断力**；一般に物を正当に認識、評価する思惟能力。「特殊を普遍の元に含まれるものとして考える能力」、つまり特殊を一般的規則のもとに包摂しうるか否かを判定することで、物事を正しく説明し、評価する能力。認識能力の中で、悟性（概念の能力）と理性（推論の能力）との中間項に判断力は位置し、悟性から理性への推移を可能ならしめる媒介。（『哲学辞典（平凡社）』）

→論理学一般は「事実問題（ア・プリオリな諸表象）」のみを扱うが、超越論的論理学は「権利問題（経験に由来しないア・プリオリな諸表象が、経験に必然的に適用されるのかを説明する）」をも包括的に分析する。

\* **「超越論的」**とは、ア・プリオリな諸表象の与件の必然的従属の原理を、そしてこれと相関的にア・プリオリな諸表象の、経験への必然的適用の原理を性質づける。[PK21]

→原則の分析論はもっぱら判断力にとっての規準となる（悟性と判断力は不可分であり、悟性形式であるカテゴリー表を判断の諸形式から導出する）。

## 序論 超越論的判断力一般について

悟性が規則の能力ならば、判断力は、規則のもとに包摂する能力、或るものが或る与えられた規則に従うものであるのかどうかを区別する能力である。

→一般論理学は判断力にとってのいかなる準則をも含まない。

→判断力は「知る」ことでは得られず、「学ばれる」ことによつてのみ得られる。[DR254]「泳ぎを学ぶということは、わたしたちの身体の諸々の特別な点を、対象のもろもろの特異な点（無数の波の現実的な運動）とのカップリングにおいて、関係＝比を形成することである」。「泳ぎ」の実例は、例えばクロールや平泳ぎに当たる（「実例は判断力のあんよ車」）。

→超越論的哲学が取り扱う諸概念はその対象とア・プリオリに連関すべきであり、よつてそれら諸概念の客観的妥当性はア・ポステリオリには立証されない。

## 第一章 純粹悟性概念の図式機能について

純粹悟性概念がそのもとでのみ使用されうる感性的条件を、言いかえれば、純粹悟性の図式機能を論ずる。

### [338] 超越論的図式

経験的直観の包摂、つまり現象へのカテゴリーの適用は、いかに可能か？いかにして純粹悟性

概念は諸現象一般へと適用されるか？

→ **第三項（図式）**；一方ではカテゴリーと、他方では現象と同種であるに違いなく、前者が後者へと適用されることを可能ならしめる第三のものがなければならないということである。媒介の働きをするこの表象は、純粹であって（あらゆる経験的なものを含まず）、しかも一方では知性的であるとともに、他方では感性的でなければならない。そうしたものが超越論的図式である。

→ **図式（≡時間）**；超越論的時間規定による「時間」は、感性（直観）のア・プリオリな形式であり、悟性のア・プリオリな形式であるカテゴリーと同種であり、他方、「時間」は多様なもののあらゆる経験的表象のうちに含まれているかぎりにおいて、現象と同種である。超越論的時間規定は、諸現象へのカテゴリーの適用、（悟性概念の図式として）カテゴリーのもとへの諸現象の包摂を媒介する。

→ **悟性概念の制限**；概念は、その概念自身に、あるいは概念を構成する諸要素に対して、対象が与えられない限り不可能である。①概念は物自体と無媒介に関係できない、②感性の変様のみが直接、対象から与えられるものである、③ア・プリオリな純粹概念は、カテゴリーにおける悟性の機能のほか、感性のア・プリオリな形式的条件を含まなければならない。

→ 悟性概念の使用に当たって、それを制限する感性の形式的条件を「悟性概念の図式」、さらにこれら諸図式をもってする悟性の手続きを「純粹悟性の図式機能」と名づける。

\* **構想力**；感性と悟性とを総合し、両者を架橋する働きを持つ。認識の質料は感覚によって与えられ、その形式は悟性のア・プリオリな総合によって与えられることから、二つの異質な源泉を結びつける構想力は両者の性質を帯びる。（『哲学辞典（平凡社）』）

### [340] 形象と図式

純粹な感性的概念の根底に潜んでいるのは、その対象の形象ではなく、図式である。三角形一般の概念には三角形のいかなる形象も決して適合することは全然ない。三角形の形象は三角形の概念の普遍性を達成できない。三角形の図式は思考の内以外のどこにもない。

\* 形象／（悟性概念の）図式は「シニフィアン（聴覚映像）／シニフィエ（概念）」の換喩的關係（『言葉と物』における中国の辞典）に対応している。しかしシニフィアンとシニフィエのあいだの亀裂「／」を媒介するもの（インターフェイス）が広義の図式機能である。

→ 「形象」は生産的構想力の経験的能力の産物であり、「感性的悟性の図式」はア・プリオリな純粹構想力の産物であり、これを通じて形象が可能になる。形象は、その形象を表示する図式を介してその概念と連結されなければならない、それ自体ではその概念と一致しない。

→ 経験的概念は、ある種の普遍的概念にかなって私たちの直観を規定する規則としての、構想力の図式といつでも直接的に連関する。犬という概念は、私の構想力がそれにしたがって或る四足の動物の形態を普遍的に描くことができる一つの規則を意味するのであって、経験が私に提示する何らかの唯一の特殊な形態や可能的な形象に制限されない。

→ 諸現象とそれらのたんなる形式とに関する悟性の図式機能は、人間の魂の深みにおける或る

隠された技術であって、この技術の真の手練を自然から察知して、解明することは困難である。

### 【342】 実在性／否定性、充実した時間／空虚な時間

外的感官にとってのすべての量の純粹形象は、空間であるが、感覺一般のすべての対象の純粹形象は、時間である。しかし、悟性の概念としての量の純粹図式は数である。数は、同種的な直観一般の多様なものの総合の統一以外の何ものでもないが、この統一は、時間自身を直観の把握（→把握の総合；多様性が通過され、この通過が取りまとめられる）において産出することによってなされる。

→人は、時間においては、或る一定の度を有する感覺から、その感覺の消滅にいたるまで下降し、あるいは、感覺の否定性（=0）からその感覺の或る量へと徐々に上昇してゆく。

\*以下、時間と図式が関連付けられる。

①実体の図式；時間における実在的なものの持続性、經驗的時間規定一般の基体としての実在的なものの表象、②原因性の図式；多様なものの、一つの規則に従う継起、③相互性の図式；異なる実体間の諸規定相互が、一つの普遍的規則にしたがう同時性、④可能性の図式；時間における物の表象の規定、⑤現実性の図式；ある規定された時間における現存在、⑥必然性の図式；全ての時間における対象の現存在

→諸図式は、規則にしたがうア・プリアリな時間規定以外の何ものでもない

①量の図式＝時間系列；対象の継起的把握における時間自身の産出（総合）

②質の図式＝時間内容；感覺と時間の表象の総合、時間の充実

③関係の図式＝時間秩序；全ての時間における諸知覚相互の関係

④様相の図式＝時間総括；或る対象がどのように時間に所属しているのか

→構想力の超越論的総合を通じて働く悟性の図式機能は、内的感官における直観の全ての多様なものの統一以外の何ものでもなく、間接的には、内的感官に対応する機能としての統覚の統一に帰着する。

\* **統覚**；現実についてのあらゆる直観にともなう自己意識である經驗的統覚と、あらゆる可能的經驗に先立ち、經驗を構成し、可能にする超越論的統覚を区別する。（『哲学辞典（平凡社）』）

→純粹悟性概念の図式は、純粹悟性概念に、客観との連関を、したがって意義を提供する真の唯一の条件であり、それゆえカテゴリーは結局は可能的な經驗的使用以外のいかなる使用をももたない（しかし、可能的經驗と普遍的連関のうちに、すべての經驗的真理に先行して、それを可能ならしめるところの超越論的真理がある）。

→感性は、悟性を同時に制限しつつ、その悟性を実在化する。

\* 「dx, dy」という（感覺的）データがあり、例えば「 $dy/dx = x/y$ 」という図式（円の微分方程式）があり、さらに「 $x^2 + y^2 = R^2$ 」という円の概念があるならば、「/」という斜線あるいは関係＝比によって現されるものが構想力の働き（図式機能）である、か？